新聞社説と要約文の表現類型
学部学生・学部留学生による140字大意の比較

湯浅千映子

要旨

本稿は、初年次段階の学部学生と学部留学生が書いた新聞社説の大意の要約文の分析を通して、原文となる新聞社説の文章の全体的構造を学部学生と学部留学生がどのように把握し、大意の要約文上にどう表現するかを明らかにした。

新聞社説の原文と学部学生と学部留学生による大意に佐久間編著（2010: 28）の「情報伝達単位」（CU）を付与し、大意に残存する原文のCUの出現傾向を調査した結果、学部留学生の大意には、原文の主題文のCUが少なく、原文の冒頭の話題文のCUが多く残存することを確認した。また、新聞社説の原文と学部学生と学部留学生による大意の文章構造類型を比較したところ、学部学生は、原文の文章構造を反映し、要約文の「Ⅲ．終了部」に主題文が位置する「尾括型」の大意を書く一方、学部留学生は、原文の話題文を中心文とする「頭括型」の大意を書くことが多い。

キーワード
要約文、大意、文章構造、文段、読解、初年次教育

Abstract

This paper analyzes the abstracts of newspaper editorials written by undergraduate and international undergraduate students in the first year and clarifies how they understand the newspaper editorials' overall structure and how they express them in the abstracts.

According to the analysis, International undergraduate students often write abstracts without the topic sentence (author's assertion) and write abstracts with a "topic presented" sentence.

Besides, undergraduate students write the Bikatsu-gata (main idea at the end of the sentence) is located at the end, reflecting the original text's sentence structure.

On the other hand, international undergraduate international students write the Tokatsu-gata (main idea placed at the start of the sentence) centered on the "topic presented" sentence at the beginning of the original sentence.

Key words
summary, main points of the text, sentence structure, passage of the sentence, reading comprehensionfirsty, first year education

The Structural Patterns of Summary Written by First-year Undergraduate Students

Chieko Yuasa

1 本研究の目的

学部学生と学部留学生が大学初年次の段階で直面する問題の一つに「課題レポート」の作成がある。学生は、一般教養科目の授業などで担当教員から指定された課題図書を批判的に読み、内容をまとめて、問いを立て、自身の意見を述べる。筆者は、2013年からの2年間、私立K大学経営学部で、学部学生と学部留学生の混成クラスによる初年次必修科目「文章表現法」（1年次前期開講・半期15回）を3クラス担当し、河野（2002: 17–28）の「テキスト批評」を参照して[注1]、テキストの「要約」を含む「課題レポート（ブックレポート）」の完成を到達目標に掲げ、授業を行い、受講者を対象に、新聞社説の「大意」と「要旨」にまとめる調査を行った。

「要約」とは、「理解主体（読み手・聞き手）が目的や内容に応じて、元の文章（「原文」）・談話（「原話」）の主旨を変えずにより少ない言語量（文字数・発話量）でまとめる言語行為」（佐久間2018: 990）である。また、「大意」とは、「原文の構成に従い、内容の提示順を変えずに、主要な表現を用いて縮小」したものと定義される（佐久間2018: 990）。「要約」は、文章・談話の理解と表現の両面に関わり、個人差がある一方で、複数の要約文に共通する理解と表現の類型があるとされている（佐久間2018: 990）。

河野（2002: 17–28）の「テキスト批評」の形式に沿って「課題レポート」を作成する場合、「要約」が「問題の提起」や「議論」とともに、論理的な文章を構成する一部分を成す[注2]。また、「問題の提起」や「議論」の際には、テキストから原著者の主張を取り上げ、その内容を要約して引用し、それを根拠として、各自の意見主張を展開する。レポートの最後は、各自の意見主張を含むレポートの全内容をまとめる。ここで、レポートの書き手である学生は、課題図書を要約する過程で、課題図書の内容への理解を確かなものとする。さらには、レポートの読み手となる担当教員に対し、学生自身が課題図書から何を読み取り、どう把握したかを表明する意味もあり、課題図書の内容を的確に要約することが「課題レポート」における評価基準の一つにもなる。このことから、「要約」は、初年次教育のアカデミックライティングの指導において重視すべき活動であると言えよう。

本稿では、まず、新聞社説を課題図書とする「ブックレポート」を書くことを想定して、『日本経済新聞』の社説（778字）の本文の文章構造を分析する。次に、学部学生と学部留学生がそれを読み、140字にまとめた大意の要約文を分析し、社説の原文の全体的構造をどのように把握し、大意にどう表現したかを比較することで、要約文の理解と表現の類型を明らかにする[注3]。筆者が初年次の大学生を対象にレポート指導を行った経験から、学部学生の場合、原文の文章構造を理解して、適切に表現する要約文を書くのに対し、学部留学生の場合、原文中の筆者の意見主張の位置や原文の重要語句が何かは把握できるものの、要約文として書く際に表現が不十分となるという仮説を立てる。

2 先行研究と本稿の立場

2.1 要約の過程と要約の方法

佐久間（2018: 990）は、要約行為の過程について、「①原文・原話の内容理解」に始まり、「②原文・原話の主題・結論の把握」、「③原文・原話の構造類型分析」、「④原文・原話の主題文と中心文の把握」の後、「⑤要約文の内容の再構成」、「⑥要約文の表現」に至るという。佐久間（2018: 991）では、原文の文章構造を要約文に反映させ、原文の「Ⅰ．開始部」・「Ⅱ．展開部」・「Ⅲ．終了部」の大文段の中心文を書き、原文の結論を表す主題文を言い換えずに書き、原文の重要な話題を表す提題表現・叙述表現を書くなどの要約規則を示している。

2.2 文段、中心文と文章型

市川（1978: 126）は、「文段」について、「文章の内部の文集合（もしくは一文）が、内容上のまとまりとして、相対的に他と区分される部分である」と定義する。また、市川（1978: 127）は、「段落における中心的内容（小主題）を端的に述べている文」を「中心文」とした。一方、佐久間編著（2010: 86）は、「段」の統括機能による「中心文」の分類として、「話題文」・「結論文」・「概要文」など7類16種を挙げる。また、佐久間（1999: 14）は、文章全体を統括する「主題文」

を含む「中心段」の配列位置と頻度によって、「頭括型」（文章の冒頭部に中心段が位置）・「尾括型」（文章の結尾部に中心段が位置）・「両括型」（文章の冒頭部と結尾部に中心段が位置）など6種の文章型に分類する。

2.3 日本語学習者の要約文研究

佐久間編著（1989）は、日本人大学生の要約文の文章構造を分析するために、論説文を「原文残存認定単位（ZT）」により区分し、残存認定を行い、原文と要約文の対応関係を調査し、要約が意味内容のまとまりである「文段」に基づいてなされ、原文の「文章構成類型」が要約文の文章構造に反映するとしている（佐久間編著1989: 234）。佐久間編著（1994）は、日本人大学生と韓国人の日本語学習者を対象に「尾括式」の論説文の要約文を調査し、韓国人の日本語学習者の要約文は、原文の結論の結尾部を欠く、展開部のみが不十分に残るなど、原文の「文章構成類型」に対する理解が不十分な例があるとした（佐久間編著1994: 67）。同書の小宮（1994: 193）によれば、韓国人日本語学習者の書いた要約文は、文章構成の3区分（冒頭部・展開部・結尾部）の必須成分を十分に残す要約文の割合が非常に低く、文章構成の1区分を欠く類型の中では、結尾部を欠く要約文の割合が高いという。

3 分析資料と本研究の分析方法

3.1 分析資料

本研究の調査協力者は、以下の3大学の学生であり、日本の中等教育を終えた学部学生（以下JS）が153名、学部留学生（以下RS）が108名である（RSの母語の内訳は、中国語、ベトナム語、モンゴル語、韓国語）[注4]。

A　4年制大学経営学部初年次必修科目「文章表現法」履修者JS153名とRS12名（RSは、留学生科目「日本語」も履修）。／B　4年制大学経済学部留学生科目「アカデミックジャパニーズ」履修者RS 15名。／C　4年制大学国際交流学部留学生科目「日本語講義」履修者RS 81名。

調査協力者には、「2013年10月14日付日本経済新聞の社説「ユニクロの脱・低価格に学ぶ」（778字）を読み、140字と40字にまとめなさい」と指示し、指定されたマス目付きの用紙に要約文を書いてもらった（140字の「大意」の調査と同時に、40字で書く「要旨」の調査も行った）。

3.2 分析手順

3.2.1 新聞社説の文章構造分析

原文の社説の本文の文章構造を分析した。まず、社説の全文を佐久間編著（2010:28）が「日本語の文章・談話における情報伝達を測る尺度」とする分析単位「情報伝達単位（CU）」（16類35種）に区分した[注5]。次に、市川（1978: 89–93）の「文と段の連接関係」と、形式や内容のまとまりから「文段」と「中心文」・「主題文」を定め、「主題文」の出現位置から6種の「文章型」に分類した。

3.2.2 新聞社説の140字の大意の表現分析

まず、JSとRSの要約文の原文を、佐久間編著（2010: 28）の「情報伝達単位」（CU）に分割した。次に、要約文のCUと社説の原文のCUの対応関係を比較し、社説のCUが要約文にどのように残存するか、また、社説の原文のどの出現位置のCUが要約文に残存するか（「Ⅰ．開始部」か「Ⅲ．終了部」か）という傾向を調べた[注6]。そして、社説のCUが要約文中に残る頻度とその形態の変化を見た。ここでは、要約文の各CU別の原文の残存数が要約者の総数（JS153名／RS108名）に占める割合を「原文残存率」として、原文残存率が50%以上（過半数以上の学生）のCUを、要約文に有意に残存する「頻出CU」とした。社説の文章構造を「中心文」や「文段」により比較検討し、「頻出CU」の残存状況も加味して、要約文の文章構造の類型を定めて、これにより、新聞社説の要約文の文章構造について、学部学生と学部留学生の類型の異同を分析した。

4 新聞社説の文章構造分析

次頁図1・図2に新聞社説の原文の文章構造の分析結果を示す。本調査が使用した社説の原文は、「Ⅰ．開始部」と「Ⅱ．展開部」が一つの大文段を成し、「Ⅲ．終了部」で文章全体を統括する2段構成の「尾括型」の展開である。「Ⅰ．

一 前段	Ⅰ 開始部	i	1	①[1-1]カジュアル衣料店／「[1-2]ユニクロ」を／[1-3]運営する／[1-4]ファーストリテイリングの／[1-5]売上高が、／[1-6]衣料品企業として／[1-7]初めて／[1-8]年間／1兆円を／[1-10]超え、／[1-11]世界ランキングでも／4位に／[1-13]浮上した。 ②[2-1]ブランド戦略、／[2-2]素材技術の活用、／[2-3]グローバル化などが／[2-4]功を奏した／[2-5]結果だ。③**[3-1]他の／[3-2]日本企業の／[3-3]参考に／[3-4]なるところも／[3-5]あるのではないか。**
	Ⅱ 展開部	ii	2	④[4-1]ユニクロは／[4-2]一般に／[4-3]低価格で／[4-4]成長した／[4-5]「デフレの勝ち組」との／[4-6]印象が／[4-7]強い。⑤[5-1]しかし／[5-2]実際は／[5-3]2004年に／[5-4]「低価格を／[5-5]やめます」と／[5-6]宣言。⑥[6-1]手ごろな／[6-2]価格で／[6-3]機能などに／[6-4]特徴の／[6-5]ある／[6-6]商品を／[6-7]開発してきた。⑦[7-1]広告や／[7-2]商品のデザインも／[7-3]工夫し、／[7-4]洗練された／[7-5]イメージを／[7-6]打ち出した。
			3	⑧[8-1]東レと／[8-2]防寒下着などを／[8-3]素材から／[8-4]共同開発。⑨[9-1]「機能性下着」という／[9-2]新しい／[9-3]市場を／[9-4]創造した。
			4	**⑩[10-1]こうした／[10-2]デザインや／[10-3]ブランド、／[10-4]機能を／[10-5]武器に／[10-6]アジアへ／[10-7]展開した。** ⑪今年8月末の／[11-1]ユニクロの／[11-2]海外店舗数は／[11-3]446店で／[11-4]全体の34%を／[11-5]占める。 ⑫[12-1]癖の／[12-2]少ない／[12-3]デザインは、／[12-4]流行の品を／[12-5]短い／[12-6]サイクルで／[12-7]提供する／[12-8]欧米の大手企業と／[12-9]直接的には／[12-10]競合しない。⑬／[13-2]英語の採用も／[13-3]早かった。
		iii	5	**⑭[14-1]衣料品という、／[14-2]国内で／[14-3]必ずしも／[14-4]成長分野とは／[14-5]見られていなかった／[14-6]業界から／[14-7]世界企業が／[14-8]生まれた／[14-9]意味は／[14-10]大きい。**⑮[15-1]小売店が／[15-2]売れ残りを／[15-3]自由に／[15-4]納入企業へ／[15-5]返品できるという／[15-6]古い／[15-7]慣行が／[15-8]残る／[15-9]衣料品業界で、／[15-10]生産管理まで／[15-11]自社で／[15-12]手がけ／[15-13]責任を／[15-14]持って／[15-15]売り切る／[15-16]緊張感を／[15-17]持ち込んだ点も、／[15-18]成長に／[15-19]つながった。
			6	⑯[16-1]ファストリも／[16-2]全戦全勝ではなく／[16-3]野菜事業など／[16-4]失敗も／[16-5]多い。⑰[17-1]そのぶん／[17-2]撤退の判断も／[17-3]早い。⑱[18-1]とりあえず／[18-2]やってみるという／[18-3]姿勢の表れだ。
二 後段	Ⅲ 終了部	iv	7	⑲[19-1]いま／[19-2]日本の産業界には／[19-3]個々の企業の挑戦よりも、／[19-4]政府の成長戦略に／[19-5]頼りたいという／[19-6]空気が／[19-7]見え隠れする。⑳[20-1]横並び主義で／[20-2]失敗を／[20-3]恐れ、／[20-4]慣行を／[20-5]重んじ、／[20-6]国内市場に／[20-7]閉じこもりたい／[20-8]気分も／[20-9]まだ／[20-10]残る。㉑[21-1]デザインや／[21-2]ブランド戦略の／[21-3]重要性も／[21-4]経営層まで／[21-5]浸透したとは／[21-6]言い難い。
			8	**㉒[22-1]ファストリの／[22-2]経営手法が／[22-3]万全というわけではないだろうが、／[22-4]参考に／[22-5]すべき点は／[22-6]学び、／[22-7]市場戦略や／[22-8]海外進出に／[22-9]生かしていきたい。**

図1　日本経済新聞社説「ユニクロの脱・低価格に学ぶ」（778字）の文章構造[注7]

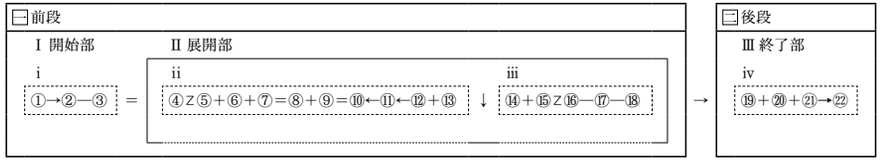

図2　市川（1978）の文の連接関係に基づく原文「ユニクロの脱・低価格に学ぶ」の文章構造

開始部」では、文①にユニクロの売上の話題を提示して、文②・③が「Ⅱ．展開部」と「Ⅲ．終了部」の予告をする。文②で、「売上1兆円超・世界4位」の要因を示す（「Ⅱ．展開部」で詳述）。文③は、「Ⅲ．終了部」の文㉒の主張を予示する。文㉒は、意見主張の「中心文」であり、文章全体の「主題文」となる。

5 新聞社説の要約文の表現の分析例

ここで実際にJSとRSの書いた要約文の文章構造を見ていく。

❶[1-1]ユニクロは／[1-2]衣料品企業として／[1-3]世界ランキングで／[1-4]4位になった。

↑（**補足型**）

❷[2-1]ブランド戦略、／[2-2]素材技術の活用、／[2-3]グローバル化などが／[2-4]あったからだ。

＋（**添加型**）

❸[3-1]生産管理まで／[3-2]自社で／[3-3]手がけ／[3-4]責任を／[3-5]持って／[3-6]売り切る／[3-7]緊張感を／[3-8]持ち込んだ点も、／[3-9]成長に／[3-10]つながった。

↓（**順接型**）

❹[4-1]ユニクロを／[4-2]運営する／[4-3]ファストリの経営手法の／[4-4]参考すべき点を／[4-5]学び／[4-6]市場戦略や／[4-7]海外進出に／[4-8]生かしたい。

図3　日本語母語話者の学部学生JS1の要約文

❶[1-1]「ユニクロ」を／[1-2]運営する／[1-3]ファーストリテイリングの／[1-4]売上高が／[1-5]世界ランキングでも／[1-6]4位に／[1-7]浮上した。

‖（**同列型**）

❷[2-1]ユニクロは／[2-2]一般に／[2-3]低価格で／[2-4]成長した／[2-5]「デフレの勝ち組」との／[2-6]印象が／[2-7]強い。

→（**転換型**）

❸[3-1]「機能性下着」という／[3-2]新しい／[3-3]市場を／[3-4]創造した。

‖（**同列型**）

❹[4-1]デザインや／[4-2]ブランド、／[4-3]機能を／[4-4]武器に／[4-5]アジアへ／[4-6]展開した。

→（**転換型**）

❺[5-1]生産管理まで／[5-2]責任を持って／[5-3]成長になった。

↓（**順接型**）

❻[6-1]市場戦略や／[6-2]海外進出に／[6-3]生かしていきたい。

図4　学部留学生RS1の要約文

図3のJS1は、原文の社説の文章構造と同じ2段構成で要約文を書いている。JS1の文❶が原文の「Ⅰ．開始部」の話題文①の内容、文❹に原文の「Ⅲ．終了部」の主題文㉒が残存する。JS1の要約文は、文❹を主題文とする「尾括型」の要約文で、原文の文章型と一致する。一方、図4のRS1は、文❶と文❻の内容がJS1の文❶と文❹と同じで、原文の文章構造を反映する「尾括型」であるが、RS1の文❷以降を見ると、原文の「Ⅱ．展開部」から各文段の中心的な内容を抜き書きし、文間につながりがない。また、文❻では、原文の文㉒の提題表現「ファストリの経営手法が」が欠けており、何を「市場戦略や海外進出に生か」すのか、わからないため、原文内容を正しく表現したとは言い難い。

6 大意の140字要約文に残存する原文の情報伝達単位（CU）

6.1 学部学生と学部留学生に多い情報伝達単位（CU）

社説の原文の情報伝達単位（CU）がJS153名とRS108名の大意の要約文にどのように残存するのか、まず、CUの総数を見ていく。E（エラー）を含めず、G（原文と同じ形）とP（原文のパラフレーズ）の残存数が50％以上、つまり、JSが77名以上・RSが54名以上の残存数となるものを、JS・RSの「頻出CU」とした[注9]。表1にJS・RSの「頻出CU」を、社説の原文の出現順に挙げる。

JS・RSとも、原文の「Ⅰ．開始部」の話題文①にCUの残存数が多い。最も多く残存するCUは、JSが「「[1-2]ユニクロ」を」、RSが「[1-4]ファーストリテイリング」であった。JSは、「Ⅲ．終了部」の主題文㉒の「[22-4]参考に」・「[22-5]すべき点は」の2CUが多い。JSは、主題文㉒の9CUのうち、いずれかのCUを含む140字大意を書いたものが、153名中90名（約59%）だった。一方、RSでは、主題文㉒のCUが「頻出CU」となっていない。RSの主題文㉒の中では、「[22-8]海外進出に」が30名で最多だった。JSとRSの大意はともに、話題提示の文①を多く用いており、RSの場合は、主題文㉒よりも、話題文①のCUを多く用いている。

6.2 話題提示の文のCUの要約文における残存傾向

表2と表3に、社説の原文の話題文①を構成する全13CUについて、JS153名

表1 JS・RSの要約文に残存する情報伝達単位（CU）の頻出CU

JS153名			
文	CU		残存数（%）
①	2	「ユニクロ」を	107（69.93）
	3	運営する	79（51.63）
	4	ファーストリテイリングの	95（62.09）
	5	売上高が、	100（65.36）
	8	年間	79（51.63）
	9	1兆円を	94（61.43）
	10	超え、	95（62.09）
	11	世界ランキングでも	80（52.29）
	12	4位に	78（50.98）
㉒	4	参考に	78（50.98）
	5	すべき点は	84（54.90）

RS108名			
文	CU		残存数（%）
①	2	「ユニクロ」を	64（59.26）
	3	運営する	63（58.33）
	4	ファーストリテイリングの	79（73.15）
	5	売上高が、	68（62.96）
	6	衣料品企業として	58（53.70）
	7	初めて	56（51.85）
	8	年間	62（57.41）
	9	1兆円を	66（61.11）
	10	超え、	65（60.19）
	11	世界ランキングでも	67（62.04）
	12	4位に	68（62.96）
	13	浮上した。	70（64.81）

とRS108名のうちの何名の140字大意に残存するかを残存数と残存率（%）で示した。JSとRSの大意には、話題提示の文①のCUが多く残存する。文①のCUで、残存数50％以上、全体の過半数が用いたものが、JSが9CU、RSが11CUだった。JSの大意で残存率が低く、RSの大意で残存率が高かったのは、「[1-6]衣料品企業として」・「[1-13]浮上した」など、省略しても意味が通るCUである。また、RSで言い換えのないG（原文と同じ）のCUの残存率が高い。RSは、重要だと思う話題提示の文①を抜き書きしている。

6.3 主題文のCUの要約文における残存傾向

表4に社説の原文の主題文㉒を構成する9CUについて、JS153名の残存数と残存率（%）を示した。また、表5は、RS108名の場合である。

JSの140字大意には、文㉒のCUが（「[22-3]万全と…」・「[22-9]生かしていきたい」を除き）45%以上見られる。半数近いJSが原文全体の主題文のCUを用いて140字大意を書いており、原文の意見主張を把握し、大意上に表現できている。一方、RSの大意は、主題文のCUの残存率が多くても20%台にとどまり、多くが話題文を含む140字大意を書いていた。しかも、RSのP（パラフレーズ）の少なさが際立っている。また、文㉒が重要な文であると考えたRSは、言い換えなしに、

表2　学部学生JSの要約文に見る話題提示文①の残存数と出現傾向

文	CU	情報伝達単位	日本語母語話者の学部学生JS　153名							
			G		P		G+P		なし（Eを含む）	
			残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率
	1-1	カジュアル衣料店	29	18.95	3	1.96	31	20.26	122	79.74
	1-2	「ユニクロ」を	79	51.63	28	18.30	107	69.93	46	36.07
	1-3	運営する	77	50.33	2	1.31	79	51.63	74	48.37
	1-4	ファーストリテイリングの	80	52.29	15	9.80	95	62.09	58	37.91
	1-5	売上高が	88	57.52	12	7.84	100	65.36	53	34.64
	1-6	衣料品企業として	61	39.87	1	0.65	62	40.52	91	59.48
①	1-7	初めて	63	41.18	4	2.61	67	43.79	86	56.21
	1-8	年間	78	50.98	1	0.65	79	51.63	74	48.37
	1-9	1兆円を	88	57.52	6	3.92	94	61.44	59	38.56
	1-10	超え、	65	42.48	30	19.61	95	62.09	58	37.91
	1-11	世界ランキングでも	45	29.41	35	22.88	80	52.29	73	47.71
	1-12	4位に	70	45.75	8	5.23	78	50.98	75	49.02
	1-13	浮上した。	52	33.99	20	13.07	72	47.06	81	52.94

表3　学部留学生RSの要約文に見る話題提示文①の残存数と出現傾向

文	CU	情報伝達単位	学部留学生RS　108名							
			G		P		G+P		なし（Eを含む）	
			残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率
	1-1	カジュアル衣料店	44	40.74	2	1.85	46	42.59	62	57.41
	1-2	「ユニクロ」を	61	56.48	3	2.78	64	59.26	44	40.74
	1-3	運営する	58	53.70	1	0.93	59	54.63	49	45.37
	1-4	ファーストリテイリングの	52	48.15	25	23.15	77	71.30	31	28.70
	1-5	売上高が	59	54.63	9	8.33	68	62.96	40	37.04
	1-6	衣料品企業として	53	49.07	3	2.78	56	51.85	52	48.15
①	1-7	初めて	52	48.15	1	0.93	53	49.07	55	50.93
	1-8	年間	62	57.41	0	—	62	57.41	46	42.59
	1-9	1兆円を	64	59.26	2	1.85	66	61.11	42	38.89
	1-10	超え、	60	55.56	5	4.63	65	60.19	43	39.81
	1-11	世界ランキングでも	59	54.63	8	7.41	67	62.04	41	37.96
	1-12	4位に	65	60.19	3	2.78	68	62.96	40	37.04
	1-13	浮上した。	65	60.19	5	4.63	70	64.81	38	35.19

全文を一括して書き、140字大意に組み込んでいる。さらに、RSには、原文の内容と異なる解釈をするE（エラー）もあった。願望の叙述表現「たい」を省いて表現する例（「生かしていた。」）、主題文を途中で終える例（「参考にすべき点は学び。」）などである。RSは、文㉒が主題文であるとの認識はあるものの、原文の内容を正確に把握しておらず、また、140字大意にまとめる力もなく、抜き書きで終わっている。

表4　学部学生JSの要約文に見る主題文㉒の残存数と出現傾向

文	CU	情報伝達単位	日本語母語話者の学部学生JS　計153名							
			G		P		G+P		なし（Eを含む）	
			残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率
	22-1	ファストリの	19	12.42	55	35.95	74	48.37	79	51.63
	22-2	経営手法が	19	12.42	55	35.95	74	48.37	79	51.63
	22-3	万全というわけではないだろうが、	8	5.23	24	15.69	32	20.92	121	79.08
㉒	22-4	参考に	71	46.41	7	4.58	78	50.98	75	49.02
	22-5	すべき点は	41	26.80	43	28.10	84	54.90	69	45.10
	22-6	学び、	58	37.91	12	7.84	70	45.75	83	54.25
	22-7	市場戦略や	67	43.79	3	1.96	70	45.75	83	54.25
	22-8	海外進出に	67	43.80	9	5.88	76	49.67	77	50.33
	22-9	生かしていきたい。	32	20.92	29	18.95	61	39.87	92	60.13

表5　学部留学生RSの要約文に見る主題文㉒の残存数と出現傾向

文	CU	情報伝達単位	学部留学生RS　計108名							
			G		P		G+P		なし（Eを含む）	
			残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率	残存数	残存率
	22-1	ファストリの	26	24.07	4	3.70	30	27.78	78	72.22
	22-2	経営手法が	24	22.22	8	7.41	32	29.63	76	70.37
	22-3	万全というわけではないだろうが、	10	9.26	6	5.56	16	14.81	92	85.19
㉒	22-4	参考に	24	22.22	1	0.93	25	23.15	83	76.85
	22-5	すべき点は	18	16.67	5	4.63	23	21.30	85	78.70
	22-6	学び、	19	17.59	5	4.63	24	22.22	84	77.78
	22-7	市場戦略や	26	24.07	2	1.85	28	25.93	80	74.07
	22-8	海外進出に	26	24.07	4	3.70	30	27.78	78	72.22
	22-9	生かしていきたい。	14	12.96	8	7.41	22	20.37	86	79.63

7　大意の140字要約文と新聞社説の文章構造の比較

7.1　JSの大意の140字要約文の文章型

JSの書いた大意の140字要約文が社説の原文のどの文やどの文段と対応するのかを検討し、社説の主題文㉒のCUが要約文全体のどこに出現するかによって、要約文の「文章型」を分析する[注9]。5節で見たJS1の大意は、大意の文❹で、原文の冒頭の連体修飾節「「[1-2]ユニクロ」を」・「[1-3]運営する」と、原文の主題文（結論文）の文㉒を結合して、原文の意見主張を要約文の「Ⅲ．終了部」で示す「尾括型」である。また、JS1の大意の文❶には、原文の「Ⅰ．開始部」の中心文（話

文		文	文段	大文段
❶	ユニクロは（1-2P）／衣料品企業として（1-6G）／世界ランキングで（1-11P）／4位に（1-12G）／なった。(1-13P)	①	i	I
❷	ブランド戦略（2-1G）、／素材技術の活用（2-2G）、／グロ-バル化などが（2-3G）／あったからだ。(P)	②		
❸	生産管理まで（15-10G）／自社で（15-11G）／手がけ（15-12G）／責任を（15-13G）／持って（15-14G）／売り切る（15-15G）／緊張感を（16-16G）／持ち込んだ点も、(15-17G）／成長に（15-18G）／つながった。(15-19G)	⑮	iii	
❹	ユニクロを（1-2G）／運営する（1-3G）／ファストリの（22-1G）／経営手法の（22-2P）／参考すべき点を（22-4P+22-5P）／学び（22-6G）／市場戦略や（22-7G）／海外進出に（22-8G）／生かしたい。(22-9P)	① ㉒	i iv	I Ⅲ

図5　日本語母語話者の学部学生JS1の要約文の文章構造

題文）の文①があり、大意の文❷で、原文の「Ⅰ．開始部」の「世界4位の要因」に言及する。また、原文の「Ⅱ．展開部」の世界4位の要因を詳述する文④～文⑬のCUを省き、文段iiiの文⑮（「[15-10]生産管理まで」～）のCUを140字大意に残存させ、原文の中心段から幅広く中心文や主題文を取り上げている。

JS153名の140字大意について、原文の中心文や中心段の種類と頻度から見た大意の文章類型は、原文の話題文（文①）と結論文（文㉒）を含む「尾括型」が最も多く79名（51.6%）、結論文（文㉒）のみの「尾括型」が34名（22.2%）、話題文（文①）のみの「頭括型」が33名（21.6%）、話題文も結論文もない「潜括型」の要約文が7名（4.6%）だった。JSの140字要約文の場合、意見表明の文㉒を主題文とする「尾括型」が大半を占めている。

7.2 RSの大意の140字要約文の文章型

一方、RSによる大意の140字要約文図6～図9の例について、社説の文章構造と原文のCUの残存傾向から、RSの140字大意の文章型を分析する。

5節で見たRS1とRS2・RS3の要約文は、文章構造が社説の原文と同じで、原文の主題文㉒が要約文の「Ⅲ．終了部」に位置する「尾括型」となっている。しかし、1節の仮説で述べた通り、RS2・RS3の140字大意には、原文を要約した表現に、解釈の誤りや情報の欠落があり、原文の内容を正確に伝えていない。RS3の140字大意は、原文の話題文①の「[1-1]カジュアル衣料店」・「[1-2]「ユニクロ」を」などを部分的に抜き書きし、原文の「Ⅱ．展開部」の文④のCUを挟み、原文の話題文①の叙述表現（「[1-6]企業として」から「[1-13]浮上した」まで）が続く。要約文の「Ⅲ．終了部」の文❸に原文の主題文㉒のCUがあるが、「[22-3]参考に」・「[22-4]すべき点は」・「[22-5]学び。」という連用中止で終わり、原文の内容を表現しきれていない。RS4の要約文は、原文の話題文①の連体修飾部分を独立させて1文とし（「[1-1]カジュアル衣料店」・「[1-2]「ユニクロ」を」・「[1-3]運営する」）、原文の文構造が正しく理解できていない。また、原文の主題文㉒の内容が省かれ、原文の話題文①の内容が要約文の「Ⅱ．展開部」の文❸に位置することから、RS4は、「中括型」の140字大意と考えられる。

RSの大意の140字要約文の類型は、要約文の「Ⅲ．終了部」に社説の意見主張の主題文を置かず、原文の話題文①を中心に構成する「頭括型」であり、

文		文	文段	大文段
❶	「ユニクロ」を（1-2G）／運営する（1-3G）／ファーストリテイリングの（1-4G）／売上高が（1-5G）／世界ランキングでも（1-11G）／4位に（1-12G）／浮上した。(1-13G)	①	i	I
❷	ユニクロは（4-1G）／一般に（4-2G）／低価格で（4-3G）／成長した（4-4G）／「デフレの勝ち組」との（4-5G）／印象が（4-6G）／強い。(4-7G)	④	ii	Ⅱ
	「機能性下着」という（9-1G）／新しい（9-2G）／市場を（9-3G）／創造した。(9-4G)	⑨		
❸	デザインや（10-2G）／ブランド、(10-3G）／機能を（10-4G）／武器に（10-5G）／アジアへ（10-6G）／展開した。(10-7G)	⑩		
❹	生産管理まで（15-10G）／責任を（15-13G）／持って（15-14G）／成長に（15-18G）／なった。(15-19P)	⑮	iii	
❺	市場戦略や（22-7G）／海外進出に（22-8G）／生かしていきたい。(22-9G)	㉒	iv	Ⅲ

図6　学部留学生RS1の要約文の文章構造

文		文	文段	大文段
❶	「ユニクロ」は（1-2P）／世界ランキングでも（1-11G）／4位に（1-12G）／浮上した。(1-13G)	①	i	I
❷	一般に（4-2G）／低価格で（4-3G）／成長した（4-4G）／デフレの勝ち組との（4-5G）／印象で（4-6P）／広告や（7-1G）／商品のデザインも（7-2G）／工夫し、(7-3G）／洗練された（7-4G）／イメ-ジも（7-5G）／打ちした。(7-6E)	④	ii	Ⅱ
❸	東レと（8-1G）／防寒下着などを（8-2G）／素材から、(8-3G）／新しい（9-2G）／市場も（9-3G）／創造した。(9-4G)	⑧ ⑨		
❹	海外でも（11-3P, 10-6P）／店舗を（11-3P）／出した。(P, 10-7P)	⑪		
❺	ファストリの（22-1G）／経営手法が（22-2G）／万全というわけではないだろうが、(22-3G）／市場戦略や（22-7G）／海外進出に（22-8G）／生かしていた。(22-9E)	㉒	iv	Ⅲ

図7　学部留学生RS2の要約文の文章構造

文		文	文段	大文段
❶	カジュアル衣料店（1-1G）／「ユニクロ」を（1-2G）／運営するの（1-3E）／売上高が（1-5G）	①	i	I
	ユニクロは（4-1G）／一般に（4-2G）／低価格で（4-3G）／成長した（4-4G）／「デフレの勝ち組」との（4-5G）／印象が（4-6G）／強い。（4-7G）	④	ii	II
❷	企業として（1-6E）／初めて（1-7G）／年間（1-8G）／1兆円を（1-9G）／超え（1-10G）、／世界ランキングでも（1-11G）／4位に（1-12G）／浮上した。（1-13G）	①	i	I
❸	広告や（7-1G）／デザインも（7-2P）／工夫し（7-3G）、／洗練さ（7-4E）、	⑦	ii	II
	ファストリの（22-1G）／経営手法が（22-2G）／万全というわけではないだろうが、（22-3G）／参考に（22-4G）／すべき点は（22-5G）／学び。（22-6G）	㉒	iv	III

図8　学部留学生RS3の要約文の文章構造

文		文	文段	大文段
❶	カジュアル衣料店（1-1G）／「ユニクロ」を（1-2G）／運営する。（1-3G）	①	i	I
❷	ユニクロは、（4-1G）／一般に（4-2G）／低価価格で（4-3E）／成長した（4-4G）／「デフレの勝ち組」との（4-5G）／印象が（4-6G）／強い。（4-7G）	④	ii	II
❸	グローバル化に（2-3P）／従って（P）、／衣料品企業として（1-6G）／初めて（1-7G）／年間（1-8G）／1兆円を（1-9G）／超え、（1-10G）／世界ランキングでも（1-11G）／4位に（1-12G）／浮上した。（1-13G）	② ①	i	I
❹	しかし（5-1G）／実際は（5-2G）／「低価格を（5-4G）／やめます」と（5-5G）／宣言。（5-6G）	⑤	ii	II
❺	広告や（7-1G）／商品のデザインも（7-2G）／工夫し、（7-3G）／洗練された（7-4G）／イメージを（7-5G）／打ち出した。（7-6G）	⑦		

図9　学部留学生RS4の要約文の文章構造

108名のRSの中で40名（37%）の要約文に見られた（JSは、20.9%）。また、残る68例のRSの140字大意には、原文の主題文㉒のCUが含まれていたが、誤った表現でE（エラー）として残存するものが108名のRSの中で15名・19CUだった。佐久間（2018: 990）の「要約の過程」で考えると、「②原文・原話の主題・結論の把握」の段階に留まっており、「⑤要約文の内容の再構成」や「⑥要約文の表現」の段階にまでRSの能力が及ばないことがうかがえる。

8 まとめと今後の課題

本稿では、新聞社説を原文とする大意の140字要約文の調査分析から、要約文の文章構造の類型と、学部学生と学部留学生の間で、原文の理解や140字大意のまとめ方の相違の有無を明らかにした。社説には、「話題」と「意見主張」、主張を支える「理由」の要素が含まれる。学部学生の140字大意の多くは、社説の文章構造を反映し、これらの3要素を有し、「Ⅲ. 終了部」に「意見主張」のある「尾括型」の大意が大半であった。一方、学部留学生は、原文の「意見主張」がなく、「話題提示」の中心文を用いた「頭括型」の要約文が、学部学生と比べ、多く見られた。この場合、学部留学生は、原文の冒頭の話題文を重要な情報だと判断し、原文の主題文を重要な文だとしていない。

筆者がレポート指導を担当したある学部留学生は、課題図書を読み、「自身の考えが浮かぶものの、日本語の文章で説明することが苦手だ」と話していた。その要因は、自身が理解したことを言語化する、「理解の具現化」にあると推測される。学部留学生の中には、原文の主題文や話題文の位置が把握できていたとしても、原文の文構造や表現を正確に読み取れず、文末形式に誤用の表現が現れる要約文や原文から断片的に情報を集めただけの要約文を書く者がいる。レポートを指導する教員は、学部留学生が原文を正確に把握したかどうかを確認することができない。

こうした場合、「ブックレポート」の「要約」を書く学部留学生に対しては、課題図書の理解を表現へと結びつける指導が必要であろう。課題図書の文章構造や主題文をとらえ、文構造や文末形式を正確に読み取ることに留意し、また、その理解したことがレポート担当教員に伝わるように、指示表現や接続表現を用いて、論理的なつながりとまとまりのある要約文に表現することが求められる。

今後は、既に調査した学部学生と学部留学生の40字の要旨の要約文を分析し、また、大意と要旨を合わせて比較することにより、原文の文章構造のとらえ方や要約文のまとめ方のちがいについても、考察することにする。〈大阪観光大学〉

注

［注1］……「テキスト批評」とは、論文や著作を読んで要約し、自分の問題を提起して議論を展開される文章である（河野2002: 3）。

［注2］……「要約」の構成部分では、河野（2018: 20）の「順要約」（テキストの順を追って、原著者の主張を正確に把握し、まとめる）のやり方で要約する。河野

（2018: 20）では、テキストの各文段をごく短く、1、2行程度の一文に要約し、各文段の「一文要約」をつなげて全体の要約（「大意」に相当）を書くという方法を紹介する。

［注3］…… 佐久間（2018: 990）は、「大意」の要約率が通常、原文の約4分の1の文字数であり、原文の「Ⅰ．開始部」・「Ⅱ．展開部」・「Ⅲ．終了部」の「主題文」や「中心文」をまとめるとしている。

［注4］…… 研究倫理の理念に即し、調査の趣旨に賛同した調査協力者の要約文を対象としている。要約文の書き方に関する講義の後、授業時間外に実施した。調査協力者には、新聞社説の見出しと本文を同時に見せ、「大意」と「要旨」を140字→40字の順で要約させた。

［注5］……「情報伝達単位」（CU）とは、佐久間編著（2010: 28）によれば、「日本語の文章・談話における情報伝達を測る尺度」であるとし、「文末叙述表現」・「節末叙述表現」・「提題表現」・「修飾表現」・「引用表現」など16類35種を挙げる。

［注6］…… 佐久間（1998: 14）の方法に従い、原文と同じ表現が「G」、原文の言い換え表現が「P」、原文の誤用の表現が「E」とする。

［注7］…… Ⅰ・Ⅱ…「大文段」、ⅰ・ⅱ…「文段」1・2…形式段落、①・②…文番号、太字は中心文、太字下線部は主題文。文の上部に付した数字（1-1、1-2…）は、文番号とCU番号をさす。

［注8］……「頻出CU」は、カイ二乗検定により要約文に有意に残存しやすい単位とされる「必須成分」（佐久間1998: 14）とは異なるが、原文の重要な内容として選択されやすく、要約文の骨格を形成するという点で「必須成分」と共通する（佐久間1994: 56）。

［注9］…… 図の左端に示した黒丸が要約文の文番号、右端に示した白丸が原文の新聞社説の文番号である。さらにその横に新聞社説の文段、大文段も示した。

参考文献

市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版

伊藤光（1998）「縮小率の異なる要約文における段の再構成」『表現研究』68, pp.84–92.

河野哲也（2002）『レポート・論文の書き方入門 第3版』慶應義塾大学出版会

河野哲也（2018）『レポート・論文の書き方入門 第4版』慶應義塾大学出版会

小宮千鶴子（1994）「韓国人日本語学習者の要約作文の問題点」『要約文の表現類型―日本語教育と国語教育のために』ひつじ書房

佐久間まゆみ（編著）（1989）『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版

佐久間まゆみ（編著）（1994）『要約文の表現類型―日本語教育と国語教育のために』ひつじ書房

佐久間まゆみ（1998）「段落区分と要約文の表現方法」『国文目白』37, pp.13–23.

佐久間まゆみ（1999）「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学紀要文学部』48, pp.1–28.

佐久間まゆみ（編著）（2010）『講義の談話の表現と理解』くろしお出版

佐久間まゆみ（2018）「要約」の項解説『日本語学大辞典』pp.990–991.　東京堂出版